



# The Isle of Man

## Tourist Trophy Races 2009

松下ヨシナリ39歳、マン島 TT レース2009参戦記

# そして僕は、憧れの マン島レーサーになった。

高校生のときに見た一枚のレース写真が、僕の頭に強烈に焼き付いて離れなかった。  
「アイル・オブ・マン」。100年以上続く、公道で行われる、世界最古にして最強の二輪レース。  
その小さな憧れは、やがて大きな夢となって、20年後、僕を北の孤島へと導いたのだ。

文 / 松下ヨシナリ 写真 / 磯部孝夫

### 新参者への手荒い洗礼

なんだか現実感がない。フワフワとして足元がおぼつかないし、トイレにも何度行つたか忘れた。しかし脳の奥、アタマの芯の部分だけはヤケに覚醒していて、周りの動きが緩慢に見える。不思議な感覚だった。

2009年5月30日。マン島TTレースのプラクティス（予選）ウィーク初日。目の前にはメインストレート、左手にはグランドスタンドが見える。まだ1日目にも関わらず満杯のスタンドは、いよいよ始まる、年に一度の大フェスティバルの幕開けを今か今かと待ち構えている。

今年のマン島TTには、近年で最も多い19名のニューカマー（TT初参加者）が集まった。これから始まるのは、その初参加者がコースを覚えるため、一周60・72kmのTTコースを先導付き（ただしレーシングスピード）で回る特別走行枠「ニューカマー・セッション」だ。「いくぞ、楽しもう！」

そう言い残すと、僕の前の先導ライダーが猛然と加速していった。完全に気後れしたが、なんとか後ろに付く。ヤマハYZFR-1のタコメーターが一気に振り切れる。5速から6速。パンプビーでウネリのあるマン島の公道コースを小刻みにウィーリーを繰り返しながら駆ける。必死だ。フロントタイヤの接地感は希薄で、恐ろしくて全開になんかできない。緩いS字状のブレイヒル、急激なアップダウンを「んっのやろおー！」と叫びながらクリア、2回ほどウィーリーをして、かなり早めにブレーキングを始める。やっと1つ

目の、コーナーらしいコーナー。90のいわゆる交差点、クォーターブリッジに差し掛かる。ここまで数十秒、あつという間に3キロ以上走つた事になる。その時突然、笑いがこみ上げてきた。大笑いだ。あまりにもコースが凄過ぎた、笑ってしまったのだ。ハードなコースなのは分かっていたつもりだったが、これ程とは……。

### マン島の運命の出会い

世界最古の二輪ロードレース、「マン島ツーリスト・トロフィー・レース」は、ふだん生活道路として使われる一般道を閉鎖して行われる、本場の「ロード（公道）」レースだ。初開催の1907年以来、なんと今年で102年という歴史を誇っている。

この世界最大級のオートバイフェスティバルに集うライダーには人種、国籍、年齢、そしてオートバイのジャンルなんて垣根は全くない。レースが開催される二週間のあいだ、島内では毎日どこかでありとあらゆるバイクイベントが行われている。TTレースのみがクローズアップされているが、決してそれだけではない。マン島には「オートバイの楽しみ」がすべて詰まっているのだ。しかもそれは美しい、自然、有名な保存鉄道、ケルト文化の遺跡などと見事に共存、融和している。

僕がマン島TTの存在を知ったのは、高校一年の頃。雑誌で見たライダーの格好良さ、走りの美しさに衝撃を受け、「いつかココで走ってみたい！」と直感的に思った。その思いが高じて、ジャーナリストとして初めて取材に訪れたのはそれから20年後、2006年のこ

# The Isle of Man

Tourist Trophy Races 2009



ジャンピングスポットがコースのいたる所に存在する。6速の超高速から速度の低いものまで様々。ここは最も有名なバラフブリッジ。



マン島に來ると「空が澄み、美しい」という事にハッとさせられる。緯度の関係でこの時期、昼間は22時からいまで明るい。



は、3日目に20分12秒。4日目にはとうとう19分台に入った。順位も新人の中では常に上位に位置し、総合順位でも中段グループあたりをキープして、地元メディアの注目を浴びた。

しかし楽観は出来ない。コースの区間タイム表を見ると、コース南西グリーンヘレンから、最北の街ラムジーまでが遅い。つまりコースの左半分が苦手なのだが、どう攻略したらいいか、皆目見当がつかない。約60キロのコースを毎日3周〜4周しているのだから、すでにレーシングスピードで約1200kmを走破した計算になる。毎日が、独り耐久レース。みたいなものだ。疲労はピークに達しつつあった。だが上位のライダーは既に17分台前半(一)をマークしている。ハッキリ言って正気の沙汰じゃない。平均速度210キロ以上で、このコースを駆け抜けるなんて！

ただし僕の予選最終タイム、19分46秒も決して悪くはない、まだまだタイムは詰められる気がしたし、「トップと2分半しか離されていない」とも言えた。

次の日、マン島は雨だった。ラッキーな事に、雨は2日間、レース日程を遅らせ東の休息を許された。

### 公道300km/hから見た世界

そして迎えた6月8日、いよいよデビュー戦となる「スーパーバイクTTクラス」が始まった。

僕のスタートはゼッケン通り後方から。ゼッケン「77」はほとんど最後尾が目の前には、自分よりタイムが遅いライダーがたくさんいるが、「絶対にリスクは冒さない」と心に決めていた。僕のマシンはスーパーストック仕様、

クレグ・ニーバーを立ち上がりフル加速。ここから6速全開のまま緩い右をクリア。度胸試しのようなブラディッシュコーナーは5速。長いブラックマークは圧巻。

The Isle of Man  
Tourist Trophy Races 2009



1.チームメイト、マッツ・ニルソンは、マッチョでワイルドなナイス・ガイ。緻密かつ大胆な走りは、特に600で評価が高い。2.唯一の女性ライダー、ジェニー・ティンモス。僕の大クラッシュを真後ろで目撃した。歴代女性ライダー最速ラップを叩き出した猛者。3.08年に来日した元TTチャンピオン、ミルキヤクオイル。彼はコースを知り尽くしており、松下の挑戦に大きな力を貸してくれた。4.尊敬する友、イアン・ロッカー。今年は別コース開催のレースで2勝。TT勝利数を10に伸ばし、前人未踏のTT通算100戦も達成。



1.TTでは完走を果たす事で、より「尊敬」の対象となる、ソロ(一人乗り)としては、12年ぶりの日本人ニューカマーの人気も上々。2.素晴らしいクルー達。左から、ドッグファイトR中川若廣、浅田ふみよ。松下。オートボーイJ's高崎祐輔。サイドスタンドJPから先野隼人。3.テントには3人のライダーに為に、マシンがスタンバイ。イアンを慕って集まった、腕利き外国人メカニックのチームワークは抜群。4.日章旗とマックスフラッグに記された寄せ書き。多くの支援者の協力でこのチャレンジは成り立っている。感謝の言葉しか出てこない。

「……やったあー」拳を小さく何度も握りしめた。ビクトリーロードに詰め掛けたギャラリイからは、完走した極東からのニューカマーへ暖かい拍手が沸き起り、自分自身のカベを一つ乗り越えた気がした。

最終ラップの最終コーナー、ガバナースブリッジ越え、メインストレートへ。チェッカーフラッグが踊った。最終ラップの最終コーナー、ガバナースブリッジ越え、メインストレートへ。チェッカーフラッグが踊った。

レースも三周を過ぎると、疲労に反比例する形で、精神的には落ちていく。約2キロのサービィ・ストリートでは300km/hの超高速の中、景色が色とりどりの、美しい線になるのが分かる。路面からの振動で、メーターを読むのも困難な中、マシンの状態を感じ取ることが出来る。大丈夫、行けそう。

ピットメカニックは3名まで。チーフの中川は重要なヘルメットのシールド交換を担当。現地で合流したメカのカの先野隼人は給油を、浅田がスポンジでスクリーンに貼り付いた無数の虫を取り除く。ロスは最小限に抑えたい。スペシャルドリリンクを補給して素早くコースに復帰する。

タイヤもスリックではなく、溝付をチョイスした。「まずは完走！」と自分に言い聞かせた。TTは自分との孤独な戦いなのだ。

2時間02分17秒82。70台出走中、なんと20台がリタイアするサバイバルレースを43位で完走。驚異のTT通算100戦目のメモリアルを7位でフィニッシュした。レジェンド、イアンも上々の出来に満足気。僕の完走をチーム・ブラックホースの全員と、自分の事に喜んでくれた。幸せだったし、誇らしかったが「まだまだ、これからだ！」という思いも強く、いま思えば、これが「慢心」だったのかも知れない。

休む間もない翌日、僕が照準を合せていた「スーパーストックTTクラス」の決勝レース。マシンパワーもタイヤも、イコールコンディション。今の自分の実力を計るには絶好の舞台。スタートしてからトップスピード付近の区間が続く。バラクレーン・コーナーまで、好きな区間を目一杯飛ばした。6速全開でのジャンプや、沿道の石壁もあり気にならなくなっていた。「乗れている」と、そう直感した。

2周終えてピットイン。ベストタイムを12秒も縮め、19分34秒を叩き出したと聞き、走りの方向性が正しかった事を確認する。そこからのライディングは「気持ち良い！」の一言だった。マシンもタイヤも手足のごとくイメージ通りに動き、コースもアタマの中に浮かんでくる。危険も冒さず、落ち着いている。つもりだった……。

コース後半、スネイフェル山を望みながら、丘陵地帯を超高速アペレージで突っ走るマウンテン区間で「これは凄いいタイムが出る」と確信した。刹那、ブラックハットコーナーで、ブレーキングのタイミングが僅かに遅れた。ほんのゼロコンマ何秒の遅れが、人生最大の舞台を強制的に終わらせてしまった。

左高速コーナーをクリアできず、そのままアウト側の土手にヒットし、大クラッシュ。バラバラのマシンがコースに散乱した。負傷した僕は、そのままヘリコプターで島内の総合病院に収容された……。



Yoshinari Matsushita  
レーシングライダー兼二輪ジャーナリスト兼イベントMC兼デザイナー。そしてグレートな大バカ者の39歳(笑)。現在、都内病院にて元気に療養中。別目線のレポートはこちらで、[moto-navi.net/guest/matsushita](http://moto-navi.net/guest/matsushita)

ただ、この挑戦で大きなものも得た。友人も出来た。大いなる夢を実現させたことは、僕の人生で現在最大の出来事に間違いはない。ミスの代償は小さくないが、それ以上の掛け替えのないモノを得た。この号が出る頃に、僕は40歳になつている。いまの人生が楽しい。次の夢は、またお話しできないが、アタマの中にはたくさん、楽しい夢が、現実になる順番を待っている。

恐らく、自分を見失うほど、調子が良かったのだろう。それは「快楽」に近い感覚だった。超えてはいけないラインを超えてしまった僕は、その結果、数箇所を複雑骨折するという重傷を負った。本当に残念だったし、みんなに申し訳ない気持ちで一杯になった。

ただ、この挑戦で大きなものも得た。友人も出来た。大いなる夢を実現させたことは、僕の人生で現在最大の出来事に間違いはない。ミスの代償は小さくないが、それ以上の掛け替えのないモノを得た。この号が出る頃に、僕は40歳になつている。いまの人生が楽しい。次の夢は、またお話しできないが、アタマの中にはたくさん、楽しい夢が、現実になる順番を待っている。